

故事新編論

(一)

かわかみ・ひさとし

一般に、歴史小説とよばれている故事新編は魯迅文学のなかでどのような地位をしめているのか。小説、雑文という二つの大きな流れに對し故事新編はどんな場所に位しているか。また野草や兩地書との關係は？ これらのことは未だあきらかにされていないようである。魯迅の小説集呐喊と彷徨についてはすでに多くの人が多くを論じている、だが故事新編については寥々として少い。私の知るかぎりでは中國では雪葦の魯迅散論中の關於故事新編、文藝報一九五三年第一四號にのつた伊凡の魯迅先生的故事新編がまとまつたもので、その他多くの魯迅研究書にのつているがいずれも断片的なもので問題になるものではない。わが國ではつとに竹内好氏、その後では武田泰淳氏の魯迅とロマンチズムぐらいではないかと思う。呐喊が彷徨にくらべて故事新編について論ずるものが少いということには、それだけの理由がある。故事新編のうちには何を主題にしているのかさえよく判らないものもあるし、また一九二二年から一九三五年までの十三年にわたつて書かれた歴史的故事を題材にした八篇が、魯迅自身によつて故事新編の名のもとに一つの集にまとめられているため歴史小説という觀念にとられすぎるといふこともある。とにかく故事新

編は難物だからである。ところが最近ではすこしづつ故事新編を論ずるものが出てきた、たとえば檜山久雄氏の「故事新編」おぼえがき（中國文学会編集北斗一九五四年創刊號）。これは魯迅研究の一步前進を示しているか少くとも示そうとしていることである。雪葦の故事新編論およびこれに對する伊凡の反論はこの意味で一つのエポックを劃すものといえるだろう。

故事編新が異種の二つの材料をもつて構成されていることはあきらかな事實である。この二つの部分に對する研究、評價のちがいが故事新編に對する二つの相異つた論議の根源をなしている。二つの材料、二つの部分というのは、いうまでもなく古代神話、傳説にもとづいた古籍に關するものと、現代の事柄や現代の人物を材料にした部分とである。この二種の觀點は雪葦の「故事新編について」（關於故事新編）およびこれに對する伊凡の批判「魯迅先生の故事新編」（魯迅先生的故事新編）に最もよくあらわれている。雪葦によると、故事新編は小説の内容からディールにいたるまで古籍に根據をもつており、それらの材料を綜合したものであるとして原典をいちあきらかにしている。そしてこの出典の研究が彼の論文の主要内容となつており、じつその論文の過半はこの研究にせめられている。もつとも雪葦は大いに出典に力を注いでいるが、出典のとおりに物語を敘述したところの「教授小説」とも認めてはいない、そういう見方は誤りであるともいつている。故事新編は古籍に取材しているとはいえ現代の事實もまたとりあげられているからである。そこでこの點が彼の研究の第二の内容となつている。彼は現代の事實を神話、傳説の補充または挿話として軽く取り扱い、古籍に對して從屬的地位にあるとみている。ついで彼は現代人の材料をもとりあげ、古代神話や傳説を改めて小説に書きなおしたことは反歴史主義ではないという議論を展開し、その理由として次のようにいう。第一、この補充は傳説それ自身が必要とするものでその本質的構成部分となつている。第二、この補充は傳説自體として必須ではないが許さるべきである。すなわちその自然と完全さを破らないという條

件のもとで、傳説を充實しその戰鬪的内容と教育的意義を強めている。第三、この補充は神話或いは傳説を「現實諷刺」の道具となし、古代を現代にかえるものではなく、その反對である。

これに對し伊凡は故事新編を物語の形式で書いた雜文といつてもよいという立場であり、魯迅の目的は古人をえがく歴史小説にあるのではなく、暗黒勢力への投槍としての雜文性を強調しているのである。もちろん、二人とも故事新編の取材の二つの部分を否定していないし、また形式としての歴史小説も否定していない。問題は内容である。いつたい、一九二二年から一九三五年までの十三年間に神話、傳説を材料にして書かれた八篇の小説が歴史的題材という點で統一されながら、思想的にも文學的にもいろいろな傾向を内包しているのは當然である。補天が一九二二年十一月、鑄劍と奔月が一九二六年の十月と十二月、非攻が一九三四年八月、理水、采薇、出關、起死が一九三五年十一月から十二月の間に書かれている。この十三年間というのは魯迅の思想上からも文學上からもまた歴史觀からいつても、誰にもあきらかなように相異つた二つの時代にわかれている。この二つの時代をみずに歴史小説の名のもとに故事新編を論ずることは正當とはいえないだろう。また編迅の思想や文學のほかには歴史論というか歴史觀といつたものも考慮せずに故事新編を論ずることはできない。したがつて、こゝでは魯迅の前期に屬する補天、鑄劍、奔月の三篇と後期の五篇を一應區別して考えてみたらどうか。魯迅は一九一八年から一九二五年までの間に二十五篇の小説を書いたきりその後小説が書けなくなつた、その主觀的客觀的理由についてはすでに「魯迅の雜文」に書いたとおりである。小説も雜文も暗黒社会變革の武器であることに變りはないが、小説において特徴的なのは典型の創造であるのに對し、雜文では理論の形象化ということである。しかもその理論或いは思想がきわめて戰鬪的である。魯迅の創造した典型的人物は暗黒社会の否定的人物が多い、そういう共通性にもかゝりわらはずそれぞれが獨立した個性とニューアンスをもつている。巴人の文學論稿によると三種に分類して、一つは封建社会に生れた人物を描きその病根を治療し

ようにしたものの、二、感情において諒とするも理性では否定されねばならぬ人物、三、自然淘汰のうちに没落してゆく姿を描かざるをえなかつたが、愛憐をいだいた人物。第一に屬するものは阿Qであり、第二のものは頭髮のことのN君、酒樓上にての呂緯甫、孤獨者の魏連受、傷逝の涓生、第三は故郷の閩土、祝福の祥林嫂、離婚の愛姑である。これらの人物のほとんどは實在の人物が直接間接に擴大或いは潤色されているばあいが多い。(周遐壽著魯迅小説裏的人物参照)ところが故事新編の前期三篇となると違ふ、これらは竹内好氏のいわれるように題材がちがつているだけで作風からみれば呐喊や彷徨のなかに含まれるともいえるが、典型の點からみれば以上三種の中には入らない。これらは現實の暗黒社会に取材したのではなく古藉によつており、これらはいずれも詩的、幻想的、物語的であつて、理論の具象化としての雜文性は稀薄である。もつとも稀薄だけでないわけではない。さらに題材がちがつているということも大切である。作家は主題思想を多數の題材のうちから取捨選擇しそれを組織するが、魯迅は題材を異にすることによつて何を意圖したか。

一九二六年に書いた鑄劍、奔月の二篇はしばらくおき補天だけが呐喊時代の作品であり、その他の七篇はすべて呐喊と彷徨以後のものである。作風からいつて呐喊に入るこの作品がじつと作者によつて一旦は入れられながら後には故事新編に移された理由については成仿吾がほかの作品をけなしてこれだけをほめたからだという。これはほんとうだろう、だがそれ以上の理由があるはずである。たしかに、同時代の作品として同じ作風でありながら補天は呐喊とは截然とことなつたものをもつている。それは何か。上にも述べたように雜文性である。補天において魯迅は呐喊、彷徨のような典型の創造をしているのでもなければ雪葦のいうように歴史小説として傳説の女媧を描いているのでもなさそうである。それではどういふ主題思想のもとにこうした題材を用いたか。

故事新編のうちでも補天は主題の把握に困難なものゝ一つである。魯迅自身のことばによれば、「那時的意見、

是想從古代和現代都採取題材，來做短篇小說，『不周山』便是取了『女媧煉石補天』的神話，動手試作的第一篇。首先，是很認真的，雖然也不過取了弗羅特說，來解釋創造——人和文學——的緣起。不記得怎麼一來，中途停了筆，去看日報了，不幸正看見了誰——現在忘記了名字——的對於汪靜之君的蕙的風的批評，他說要含淚哀求，請青年不要再寫這樣的文字。這可憐的陰險使我感到滑稽，當再寫小說時，就無論如何，止不住有一個古衣冠的小丈夫，在女媧的兩腿之間出現了。這就是從認真陷入了油滑的開端。油滑是創作的大敵，我對於自己很不滿。これは故事新編の序言である。すべて魯迅の小説・雜文の理解のために序のもつ役割は大きい、いろいろな問題のカギが序のなかに秘められている。故事新編でも同じである。こゝであきらかなことは、魯迅が嘲笑をもつて小男を諷刺していることである。この小男または小男たちは五四以來の新文化に反對する反動的國學者、道學者、舊官僚をさしているとみてよい、小男たちの文語をつかつたおしやべりとこれに對する女媧の嫌惡を熱風の何篇かの雜文と比較してみよう。國學者に向つて放たれた熱火の戰鬪的諷刺は直接に補天とつながっている。それを當時の魯迅の社会的實踐、戰鬪をふり返つてみることによりしらべてみることにする。

魯迅が狂人日記をはじめとして孔乙己、藥をつぎつぎと發表していつたことは、新文學の陣營の理論に實績をあてたのみならず、新勢力をかぎりなく鼓舞激勵し、彼らの陣地を鞏固にし擴大せしめた。新勢力の昂揚は國內封建勢力および國際帝國主義にとつては脅威である。したがつて彼らの同盟は新文化に對してはげしい攻撃を加えてきた。當時、新文化新文學に對立するものとしてあらわれたものに學衡雜誌がある。この雜誌による國粹派は不偏不黨の美名のもとに舊文化舊文學を擁護し新文學を排撃した。さらに章士釗の主宰する甲寅雜誌は軍閥官僚という背後の主人の援助を仰ぎ、新興勢力に對してはさらに卑劣であつた。こうして、中國における反動勢力の復活、擡頭をみた國際帝國主義はその同盟を緊密にし新文化陣營に對し壓力脅威を加えるとともに利欲をもつて買収の誘惑の手をさし

のべ内部分裂を圖つたのである。こうして現代評論派の正人君子陳源は公正を装いつゝ内外の主人に忠勤をはげみ、徐志摩は「打倒帝國主義のスローガンは分裂と猜忌の現象である」といつて從順に帝國主義に仕え、胡適は「主義よりも研究を」と現實を離れて内外反動勢力と妥協してしまつた。この文化界の情勢のもとで、古典に明るく舊文學を自家藥籠中のものとしていた魯迅は誰よりも彼らの弱點をつくることができた。学衡雜誌の淺薄無知を衝き彼らの正體を暴露したのが熱風に收められている幾篇かの雜文である。

夫所謂学衡者、據我看來、實不過聚在「聚寶之門」左近的幾個假古董所放的毫光；雖然自稱爲「衡」、而本身的稱星尙且未曾釘好、更何論於他所衡的輕重的是非。所以、決用不着較準、只要估一估就明白了。

魯迅は舊文學、舊文言を提唱し自話に反對する彼らが、實は碌な文言も書けず、その眞價のいかなるものかをあばいている。(熱風の估「学衡」参照)

ところで、補天に戻つてみると、以上にみた雜文につながっている部分は次の二三個所である。

「那是怎麼一回事呢？」伊順便的問。

「嗚呼，天降喪。」那一個便淒涼可憐的說，「顛頂不道，抗我后，我后躬行天討，戰于郊，天不祐德，我

師反走，……」

「什麼？」伊向來沒有聽過這類話，非常詫異了。

「我師反走，我后爰以厥首觸不周之山，折天柱，絕地維，我后亦殂落。嗚呼，是實惟……」

「够了够了，我不懂你的意思。」伊轉過臉去了，卻又看見一個高興而且驕傲的臉，也多用鐵片包了全身的。

「那是怎麼一回事呢？」伊到此時纔知道這些小東西竟會變這麼花樣不同的臉，所以想問出別樣的可懂的答話來。

「人心不古，康回實有豕心，觀天位，我后躬行天討，戰于郊，天實祐德，我師攻戰無敵，殞康回于不周

之山。」

「什麼？」伊大約仍然沒有懂。

「人心不古，……」

「够了够了，又是這一套！」

女媧が創りだした小さな生物、小人の氣取つた文語のお喋りに對する彼女の嫌惡と輕蔑はあまりにもあきらかである、とくに最後の「もう澤山、くどいわ」に至つて絶頂に達する。こういう蔑視をうけながら小人はかえつて思ひ上つて満足しきつており、その表情もいろいろに變えることができる。この諷刺こそ當時の軍閥、官僚、國粹主義者、道學者のカリカチュアにほかならない。

もう一個所みてみよう。

那頂着長方板的卻偏站在女媧の兩腿之間向上看，見伊一順眼，便倉皇的將那片遞上來了。伊接過來看時，是一條很光滑的青竹片，上面還有兩行黑色的細點，比檉樹葉上的黑斑小得多。伊倒也很佩服這手段的細巧。

「這是什麼？」伊還不免于好奇，又忍不住要問了。

頂長方板的便指着竹片，背誦如流的說道，「裸裎淫佚，失德蔑禮敗度，禽獸行。國有常刑，惟禁！」

女媧對那小方板瞪了一眼，倒暗笑自己問得太悖了，伊本已知道和這類東西扳談，照例是說不通的，于是不再開口。

以上によつて補天が當時の戰鬪の必要に應じた政論思想性を含む雜文性を具えていることがわかる。恐らく上にあげた例は補天の第一主題といつてもよいのではないか。

だが、このように現實的戰鬪的の意義をもつてゐる補天には逆にもう一つの面がある。それはこの作品の幻想

性、抒情性であり、雑文のもつ嚴しいリアリズムに對するロマンチズムである。この點は誰の眼にもあきらかであり、もはや議論の余地はなさそうである。そしてこの作品にみなぎるロマンチズムが最も中心的なものである。さきに述べた政論思想性をもつた雑文性は從屬的なものであるか或いはこじつけと見做すものもあるかもしれない。それでもうすこしこの點にふみ入つてみよう。

武田泰淳氏は補天について次のようにいつておられる。

「女媧が巨大であること、また、物うげな、なかば無意識的な状態にあることは、この作品の重要な鍵であります。それは、彼女が無意識につくり出した人間たちが、彼女と反對にひどく小さかしげに意識的であり、かつひどく微小な生物であることと對比されてあるからです。……」

こゝには一種の人間蔑視、人間の文化に對する嘲笑があるやうに見えます。(一九二二年といへば、まだ彼がその政治的立場を明確にしていない頃ですが) ここには少くとも或る種の人間、ある種の文化に對する嘲笑蔑視があります。ともかく巨大にして無意識的な實行者である女神と、はじめに微小なくせにひどく意識充分な小動物たちとの對比があることだけは疑ひありません。小動物たちへの直接の諷刺批判はあるにしても、それよりもこの對比が美し今まで鮮明なイメージをとまなつて我々に迫つて來ます。女媧が存在し、そして小動物たちも存在した。どちらか一方がではなく両者が共に存在した、そしてそれが宇宙の一景をなしていたといふ眞理めいた主張が、いつのまにか私たちを包んでしまうのをおぼえます。それが鋭い不安、暗い暗示を私にあたへます。だから私はこの小篇が好きなのです。」(中央公論・昭和二十八年十二月號、魯迅とロマンチズム)

武田氏はさらにつづけてかういつておられる。

『思ひ直してみると魯迅の作品には、このやうな對比、このやうな暗示はきはめて多いのです。徹底した愚者で

ある阿Qは愚の實行者として周圍からさげすまれながら、つひに銃殺されます。そしてその周圍には、彼を殴つたり、彼から金をしぼつたり、或は彼から盗品を買つたり、そして最後に彼の處刑を見物する村の普通の人々が居ました。阿Q自身の中にある人間の弱さ醜さに對する作者の批判が痛烈なあまり、『阿Q正傳』にもある、この阿Qと村民との對比はやや明瞭でないやうですが、それを見失つてはあの小説の暗さは理解されないでせう。(同上)

武田氏はこゝで魯迅の小説における對比の重要性をのべておられる。だが、このばあいには注意しなければならぬのは、對比の性質である。故事新編のばあいと、呐喊や彷徨のばあいとは、その内容、性質がちがつているのではないか。それにまた、武田氏のいわれる阿Qの例でも、阿Qと村民の對比とだけみることに疑問がある。魯迅の小説では、多くのばあい、對比が用いられている。阿Qを除いても故郷、藥、孔乙己、祝福、長明燈といくらでもその例はあげられる。これらにおいて主人公に對比されている多くの人びとというのは大部分が農民である。その農民というのがまた人間關係や社會關係などに向に無頓着で、何らの關心をもたない、いわゆる無自覺な後れた農民である。これらの對比されている農民を魯迅はどう考えていたか。彼は否定さるべきもの消滅されるべきものとして、描いているのか。たしかに、そうである、だが他方では、彼らの弱點、缺點を描くことによつて、彼らを自己改造にたち上らせようともしているのである。魯迅は農民大衆を衆愚として一蹴しようとはしていない。したがつて、魯迅は、小説で對比されている大衆について、二つの思いをいだいている。すなわち、長期にわたる封建支配階級の搾取と壓迫によつてつくられた大衆の弱點に對し、それを憎むとともに、また彼らの自己改造も期待していることである。ところが、故事新編の補天になると、女媧に對比されているものは小男であり、これは完全に攻撃され抹殺されるべきものであつて、魯迅としては一くれの愛憐も覺えないものである。同じ對比でありながら、呐喊、彷徨と故事新編では内容的、質的にちがつている。これを形式的に、量的にみることは誤つてはいないか。さらにまた、武田氏

が阿Qと村民の對比といつて、一括しておられる村民にも、實際はいろいろな層がある。阿Q正傳のばあいならば、雇農、貧農のほか地主やその幫間がいる、これらを魯迅は一括して村民として表現し對比させているのではない、彼らの間の對立は阿Qのテーマの一つである。したがつて、對比の例として單に阿Qと村民との對比と形式的に處理されるのは當をえていないのではないか。

魯迅にとつて讚美し擁護し鞏固にし發展せしめようとしたものは、新らしいもの、生成しつゝあるもの、進歩的なものであつて、舊く、死滅しつゝあり、かつ反動的なものは極力これを消滅さすべく完膚なき攻撃を加えたのである。したがつて、補天がいかにロマンチックな對比の美しさにみちみちていようとも、魯迅が意圖したものは、反動的な人物への攻撃というリアリスチックなことである。補天のロマンチックな美しさに眩惑されて、それを高く評價しすぎ、魯迅の主な意圖である現實主義を低くみることは正しくないように思われる。

補天をはじめとして故事新編が多分にロマンチズムの要素をもつていているといふことはまぎれもない。故事新編の前期の作品についてはとくにそうである。しかし後期のものについては概していえないのではないか。また前期に屬する三篇もこれを單獨に孤立せしめてみれば、たしかにロマンチズムに屬するといえる、だが、魯迅の文筆生活の全生涯にわたつてこれを眺めると運う。文學者としての魯迅は一生を貫いてリアリストであつた。もつともこのことは魯迅にロマンチズムの氣味がないということではない。文學者は多少なりとロマンチストである、これを機械的にわけることはできない。冷靜といわれた魯迅がいかにその皮下に熱血をたぎらしていたかはすでに知られていることである。また一九二二年時代に自殺を想つたこともある魯迅である。一面において魯迅がロマンチストであることは否定できない、そして故事新編のロマンチズムも否定することはできない。これは彼の虛無思想を否定しえないのと同じことである。たとえば野草であるが、これはほぼ故事新編と同じ頃に書かれている。そしてこゝに何

ともいえない重苦しい虚無感がたゞよつてゐる。しかし同時にまた戰闘的でしかも將來に光をのぞむ樂觀主義もまた存在している。野草に虚無主義のみを見るのは正しくないし、戰闘的樂觀主義のみを強いて重視しようとするのも誤つてゐる。しかし故事新編についても同じことがいえるだろうか。社会的戰闘の必要性に應じた尖鋭な諷刺と批判の政論と思想をもつ雜文性と共に幻想的で現實ばなれした美しいロマンチズムは故事新編の前期作品の特徴である。われわれはこれを折衷してしまつていゝだろうか。私はこの二つを折衷してみようとする立場にはくみしがたい。補天などがいかにロマンチズムに溢れこれが支配的にみえようとも、それは外貌にすぎず基本的本質的なものはその雜文性にあるからである。なぜか。野草のばあい、希望と絶望、光明と暗黒、戰闘と寂寞、樂觀主義と悲觀主義が混沌としてその内容を構成している。だが故事新編では、右のような當時の魯迅思想の矛盾が内容となつてゐるのではなく、その主題思想はあくまでも戰闘的、批判的であり、その筆鋒は反動的な暗黒社会やその支配的人物に向けられている。さらに同時代の雜文である熱風や華蓋集を見るならば事情はまた違つてゐる、こゝには野草の混沌や孤獨懷疑や虚無もなければ、故事新編のロマンチズムもない、こゝにあるのは熱火の戰闘、辛辣な諷刺である。同時代に書かれたこれらがどうしてかくも異つてゐるのか。こゝでわれわれは彼の經歷、生涯をもう一度思い返してみることがある、彼の生涯のどんな時に社会、國家、民族、人民の進歩、利益、幸福を考えないときがあつたらうか。彼が醫學を学んだのもまた後に文學に轉じたのもすべて社会國家の進歩、民族人民の幸福を求めてのことではなかつたか。とすれば魯迅の文學が文學のための文學ではなく、人生のための文學でなければならぬのは當然であるし、その内容が政治性に富んでゐることもいうまでもない。すなわち、魯迅の文學は社会變革、民族性の改造という革命的立場にたつてゐるのであり、革命思想の傾向性をもつてゐる。この革命思想の傾向性ということが魯迅の文學でいちばん大事である、これあるために彼の文學は高い藝術性と眞實性を統一し深刻に典型を創造することもできたし、現實の矛

盾と闘争を認識しその悪傾向を痛烈に批判し諷刺することもできたのである。これが魯迅文学の基本内容である。この基本内容は時の社会情勢における新舊勢力の力関係や闘争の模様によつていろいろな形をとつてあらわれてくるし、また魯迅自身にそれが反映されたばあいの感受度によつてもちがつてくる。ましてこの時代の魯迅はマルクス・レーニン主義的に自己改造はなしておらず、舊きものゝ死滅を信じながら新しきものゝ何かを知らなかつた時代であり、一方には光を望み勇をふるつて戦いながら他方では強大な暗の力にうちひしがれそうな自分の姿をみていたのである。こういう魯迅の戦闘面をあらわしているのが、熱風や華蓋集の雜文集であり、戦いながらなお不安と動搖、懷疑と虚無をあらわしているのが野草である。敵に對して苛責なき攻撃を加えながら、なお心底には壓倒的強大な暗黒勢力に對する無力感が芽生えないわけにはゆかなかつた。故事新編でもやはり敵に對する戦闘を忘れてはいない、だが野草のニヒリズムとはちがつてロマンチズムがあらわれてくる、その發生根源は第一に野草のニヒリズムのばあいと同じであると考えられる。第二には激烈な戦闘に疲れた戦士魯迅がいこいの場所を求めたともみられないことはない。第三に戦いは一つであるが戦いの方法はいくらでもある、魯迅は多様な戦闘方法、形式をとつたのである。第四に當時魯迅は歴史や古籍を研究していた、これらを素材として、小説の分野に新しい境地を拓こうと試みていたのであろう。典型の上からいつても呐喊、彷徨は否定的人物が多いが、現實のうちに肯定的積極的人物を見出すことができなかった魯迅は故事新編で肯定的人物を描こうとしている。

以上によつて私は故事新編においてはその雜文性すなわち戦闘性、革命的思想の傾向性ということが基本的なものであり、ロマンチズムは、從屬的であり魯迅の社会的實踐および戦闘の過程における心情の波動の一種とみる。たゞロマンチズムの要素を多分に含んでいるというだけにとゞまる。故事新編は創作方法としてもロマンチズムではなくリアリズムであり作者としての魯迅はリアリストである、補天にみちみちているロマンチズムもよく讀め

ば、現實の暗黒を逃避し胡魔化し或いはこれと妥協しようとするものではなく、積極的に暗黒の現實を暴露し批判し攻撃し、それらをはつきりと反映しているからである。このようにリアリズムとロマンチズムを兼ねそなえていることは補天だけではなく故事新編の前期の作品に共通するところであり、故事新編の研究には重大なカギを提供しているように思われる。というのは、後期の作品にはロマンチズムの要素はなくなり完全に雑文性ばかり残されているといつてよいから、これを一つの推移轉化としてみ、魯迅文學の小説から雑文への轉化發展をこゝに見出すことができるからである。これは竹内好氏のいわれる詩的抒情的物語的なものから散文藝術への轉回である。

補天のもつ二面性二重性は右のとおりである。それでは雪葦のいう歴史小説というみかたはどうであろうか。雪葦によると、補天は主として風俗通、山海經、淮南子、列子、楚辭、郊祀志、漢武故事などからとつて綜合したものである。その例として次のようなものをあげている。

『俗説：天地開闢，未有人民，女媧搏黃土作人，劇務力不暇供，乃引繩於絙泥中舉以爲人。』（載『風俗通』、『太平御覽』卷七十八引。）

『西北海之外，大荒之隅，有山而不合，名曰不周負子，有兩黃獸守之。有水曰寒暑之水，水西有濕山，水東有幕山，有禹攻共工國山。有國名曰淑士顛頊之子。有神十人，名曰女媧之腸。……』（『山海經』、『大荒西經』第十六。據商務四部叢刊本。又，郭璞註云：『淮南子曰：昔者，共工與顛頊爭帝，怒而觸不周之山，天維絕，地柱折。故今此山缺壞不周匝也。』又註：『女媧之腸』或作『女媧之腹』。）

『往古之時，四極廢，九州裂；天不兼覆，地不周載，火濫燄而不滅，水浩漾而不息；……於是女媧鍊五色石以補蒼天，斷鼈足以立四極，積廬灰以止淫水。……』（『淮南子』：『覽冥訓』。）

『……天地，亦物也。物有不足，故昔者女媧氏鍊五色石以補其闕，斷鼈之足以立四極。其後共工與顓頊爭爲帝，怒而觸不周之山，折天柱，絕地維。故天傾西北，日月星辰就焉；地不滿東南，故白川水潦歸焉。』（『列子』：『湯問』。）

『昔者共工與顓頊爭爲帝，怒而觸不周之山，天柱折，地維絕。天傾西北，故日月星辰移焉；地不滿東南，故水潦塵埃歸焉。』（『淮南子』：『天文訓』。）

『繇何所營？禹何所成？康回憑怒，地何故以東南傾？』（屈原：『天問』。又：『辭源』註：康回，共工名。）

『渤海之東，不知幾億萬里，……其中有五山焉。……所居之人，皆仙聖之種。……而五山之根無所連着，常隨潮波上下往還，不得暫峙焉。仙聖毒之，訴之於帝。帝恐流於西極，失羣聖之居，乃命禺彊使巨鼈十五，舉首而載之。……』（『列子』：『湯問』。按：關於『禺彊』，『山海經』，『大荒經』云：『北極之神名禺彊，靈龜爲之使也。』又：『列仙傳』云，巨鼈載蓬萊山而扞滄海之中。『玄中記』云，即巨龜也。又：『天問』：『鼈載山拼，何以安之？』）

『秦始皇并天下，甘心於神仙之道，遣徐福韓終之屬，多資童男童女，入海求神采藥。……』(載『郊祀志』、『太平御覽』卷八百八十一引。)

『上欲浮海求神仙，海水暴沸涌，大風晦冥，不得御樓船，乃還。』(載『漢武故事』，『古小説鈎沈』輯。)

『魯迅全集』第八卷四六九頁。)

これらを見れば雪葦のいうように内容からデイトールに至るまで古籍によつてゐることはたしかであり、歴史を描いたといえるかもしれない。だが古典にあかるい魯迅として、たとえ古籍に託して現代を諷刺するにせよそれらを見做すはすはないからこれをもつて直ちに歴史が主題であり現代の事實は單なる補充と見做すわけにはゆかない。それでは雪葦に眞向から反對する伊凡の説は正しいであろうか。これはなかなか難しい問題である。この問題を解決するカギは魯迅が歴史や神話傳説をどう考へていたかと關係してくる。

それです、魯迅が史籍や神話傳説をいかにみていたかを知る必要がある。

文學者である魯迅はまた歴史家でもあつた、このばあひ彼の學問藝術への基本的態度として歴史のために歴史を研究してゐない。具體的な中國の歴史を研究することによつて歴史科學の内容と本質をあきらかにし、從來の歴史を批判して新らしい時代の方向を求めている。魯迅は中國の歴史に何を見たか。彼は多くの雜文で中國の封建支配階級がいかに歴史的事實を歪曲しふみにじり歴史を改ざんしてきたかを證明している。從來の史籍の多くは帝王の家系圖で、歴史家の大部分は彼らの御用史學者であると。だから中國の歴史は人民被壓迫の歴史であると同時に人民反抗の歴史でもあつたという事實は、あまり史籍にのつておらず人民戰鬥の歴史は抹殺されている。このように中國の史籍

は支配階級によつて長期にわたりゆがめられてきたしめどちらかといえは虚偽の方が多し、したがつて多くの史籍は書き改められねばならぬと魯迅はいつている。だがこのことは中國の史籍にはとるべきものがないと魯迅が考えていたことにはならない。魯迅が反對したのは支配階級の利益に奉仕するため眞實をゆがめた御用史籍であり、多少なりとも氣骨をもつた歴史家の手になるところの「民族の魂を反映し將來の運命を預見している」ものは重視したのである。魯迅の史籍に對する考へは次の文章にあきらかである。

先前，聽到二十四史不過是『相斫書』，是『獨夫的家譜』一類的話，便以爲誠然。後來自己看起來，明白了；何嘗如此。

歷史上都寫着中國的靈魂，指示着將來的命運，只因爲塗飾太厚，廢話太多，所以很不容易察出底細來。正如通過密葉投射在莓苔上面的月光，只看見點點的碎影。但如看野史和雜記，可更容易了然了，因爲他們究竟不必太擺史官的架子。

秦、漢遠了，和現在的情形相差已多，且不道。元人著作寥寥。至於唐、宋、明的雜史之類，則現在多有。試將五代、南宋、明末的事情的，和現今的狀況一比較，就當驚心動魄于何其相似之甚，彷彿時間的流駛，獨與我們中國無關。現在的中華民國也還是五代，是宋末，是明季。（華蓋集，忽然想到）

野史和雜記自然也免不了有訛傳，挾恩怨，但看往事却可以較分明，因爲它究竟不像正史那樣地裝腔作勢。看宋事，三朝北盟彙編已經變成古董，太貴了，新排印的宋人說部叢書却還便宜。明事呢？野獲編原也好，但也化爲古董了，每部數十元，易于入手的是明季南北略，明季稗史彙編，以及新近集印的痛史。

史書本來是過去的陳帳簿，和急進的猛士不相干。但先前說過，倘若還不能忘情于咿唔，倒也可以翻翻，知道我們現在的情形，和那時的何其神似，而現在的昏妄舉動，胡塗思想，那時也早已有過，並且都鬧糟了。（華蓋集，這個與那個）

これが魯迅の歴史觀、史籍觀である、右にあげた引用文は階級的立場を明確にした一九二七年以前のものでちやうど故事新編や野草を書いていた時代の雜文である。しかしそれでもそのなかには彼の階級的觀點を發見できている。正史といわれるものは歴代王朝の欽定歴史でありその時代の政治によつて制限され支階配級の要求により書かれている。魯迅は歴史的事實の數々をもつてこれを實證する、正史によれば漢の高祖劉邦は天子の子孫ということになつてゐるが實は無頼の徒から成り上り、農民一揆に参加し後には農民を裏切つて王位についた。明の太祖朱元璋は皇帝になると蒙古を「大元」といふさらに漢人を殺害すること蒙古人よりもひどかつた。これに反して、支配階級によつて反逆者の烙印をおされ或いは謀反としいられた事件こそ社会發展の背骨であり歴史の推進者であり、民族と歴史の魂の具現者だつたのである。だから魯迅は歴史の本質内容を知るのに殆ど役立たない正史の階級性を暴露したのみならず、さらに進んで在野の私人の手になる野史、雜記、詩詞、民間物語、小説、戯曲のうちにかくされた眞實をもとめた。こうして正史のしるす英明にして慈悲深い君主の荒淫無恥をあばいた魯迅は不逞の徒や匪賊と罵られ眞實を暗に葬られた人物に民族の魂を見出している。

我們從古以來，就有埋頭苦幹的人，有拚命硬幹的人，有爲民請命的人，有捨身求法的人。……他們有自信，不自欺；他們在前仆後繼的戰鬥，不過一面被摧殘，被抹殺，消滅于黑暗之中，不能爲大家所知罷了。（且介亭雜文・中國人失掉自信力了嗎）

こうして歴史のうちに消極的面と、もになお積極的な一面も見落さなかつた魯迅は中國社会變革の一刻も忽かせにできないことを確信する。

同じことを神話傳説についていつてもよいのではないか。魯迅の神話傳説に對する考えをわれわれは中國小説史略に見出すことができる。その第二篇を見よう。

志怪之作，莊子謂有齊諧，列子則稱夷堅，然皆寓言，不足徵信。漢志乃云出于稗官，然稗官者，職惟采集

而非創作，『街談巷語』自生于民間・固非一誰某之所獨造也，探其本根，則亦猶他民族然，在于神話與傳說。

社会のあらゆる富が労働の産物である以上文学という精神上の創造物もやはり労働の産物でありしかも社会的労働の産物である。神話傳説も文学の一部分として同様である。したがつて文学は本來社会的な實用の必要性から生れ労働とはきり離せないし、個人の創造によるものではない、これが文学の起源である。だから魯迅は晩年にいたつてこの見解を門外文談でさらに具體的に發展させている。

つゞいて魯迅は神話傳説の性質および宗教藝術文学との關係を次のように述べる。

昔者初民，見天地萬物，變異不常，其諸現象，又出于人力所能以上，則自造衆說以解釋之：凡所解釋，今謂之神話・神話大抵以一『神格』爲中樞，又推演爲敘說，而于所敘說之神，之事，又從而信仰敬畏之，于是歌頌其威靈，致美于壇廟，久而愈進，文物遂繁。故神話不特爲宗教之萌芽，美術所由起，且實爲文章之淵源。惟神話雖生文章，而詩人則爲神話之讐敵，蓋當歌頌記敘之際，每不免有所粉飾，失其本來，是以神話雖託詩歌以光大，以存留，然亦因之而改易，而銷歇也。如天地開闢之說，在中國所留遺者，已設想較高，而初民之本色不可見，即其例也。

これによると神話は自然現象（および社会生活）の古代人への反映であり古代人のそれらに對する解釋、認識である。中國小説史略は歴史唯物論の立場から書かれているのではない、そして神話の現實的要素のうちにもしばしば現實より離れて一致していないことがあるということも統一してみていない。しかし神話を古代人の無知蒙昧と夢となす觀念論的見解からは遠ざかつている。それにまた神話が詩人の手によつて本來の面目を失つていつたことにはふれているが、これは文学的に修飾されたばあいのことをついでるのであつて、歴史にみたような支配階級の意識的な變改には及んでいない。さらに後には中國に神話の少い原因として神鬼不別と觸れているが、雜文で歴史の問題を解

明したような明快さに欠けている。だからこれを補つてみると、神話傳説も働らく人民の創造したものとして本來は人民性をもつていた。ところがまさにこのために封建支配階級は意識してこれらを改變し或いは埋没せしめたのであると。

これで一應魯迅の歴史や神話傳説に對する觀方がわかつた。これでもう一度補天を讀みなおしてみる。すると、反動的な官僚、國粹者、道學者への諷刺が第一主題となつていゝといつても、前に武田氏の文章を引いたように、これらの小人物は微小であり巨大な女媧との對比において描かれている。すなわち一方に消極的否定的な微小物に對し、他方に巨大で實踐的な女媧が對置されているといふことは、補天の主題が女媧にもあることを意味している。いつたい女媧という女神に關する神話は社会的にどんな意義をもつていいのか。李長之の中國文學史略稿第一卷ではこれを次の六つに分析している。

(一) 女神である女媧がかくも偉大な力をもつていゝといふことは、母系氏族部落コンミュンにおける婦人の地位を反映している。

(二) 女媧の補天は、中國古代の勞働人民が自然とたゞかつた勇敢で偉大な創造精神を反映している。

(三) 五色の石で天をつくるつたことで、古代人が美しい幻想をもつていたことがわかる。

(四) 地東南に滿たずは、古代人の中國地形觀である。

(五) 蘆の灰で洪水をとめるのは、巫術思想である。

(六) 共工の行いは、この神話が奴隸社会にいたつて、奴隸主に對する奴隸の反抗を反映している。

これらのうち(一)から(三)までは補天のうちにあらわされている。史籍、神話、傳説、民間の物語などから民族の魂をほりだし、これを讃えようとした魯迅は、はじめ眞面目な氣持からうるわしい物語のなかに積極的創造的な勤勞精

神の女媧を讃えようとしたのではあるまいか。伊凡自身も、創造精神と労働の化身である女媧をたゞえるとともに、口やかましい道学者連に最大の蔑視と憎悪をなげかけているといつていい。だから補天は、雪葦のいう歴史小説として、はじめは歴史を描くべく出發したものであるう、これを雑文の一體として出發したとみるのは誤つていゝのではないか。だが、はじめは歴史を描くつもりであつても中途で變ることがある、それが序のなかで述べられているのではないかと思う。魯迅は補天のなかで歴史や神話の眞實と虚偽、積極面と消極面、肯定面と否定面といつたものを、雑文においてなしたと同じようにこゝろみている。この意味では歴史を描こうとしているし、歴史小説である。しかし、現代の事實を單にそれらの補充と見做す見解は正しいとはいえない。私としては雪葦よりも伊凡の説の方が正しいように思われる。

二

次に奔月と鑄劍の雑文性をみてみよう。

奔月において魯迅が何を意圖したかについてはすでに定説がある。夷羿とその弟子逢蒙との争いを取り扱い、その弟子の卑劣な行爲のうちに高長虹に一矢をむくいているということが、魯迅によつて述べられている。當時の魯迅の心境は、同じ頃に書かれた雑文や書簡、とくに兩地書の第二集にあきらかたで、兩地書第二集は奔月の註釋にもなる。これらを参考にしてみると、奔月はたゞ高長虹への諷刺のみとゞまつてはいない。逢蒙は高長虹で常娥は誰だといつた詮議はやめにしておこう。たゞ大切なことは、補天にみられなかつた一つの特徴をもつていゝことである。というのは、兩地書や野草には見受けられるが、作品中にはみられない、彼自身の心情の吐露があるといゝことである。野草が戰鬪的であると同時に悲觀的で暗く、兩地書がねばり強い戰鬪精神の表白とともにやはり孤獨寂寞の情を

たゞえてゐるように、奔月も裏切者への輕蔑のうちにも寂寞の思ひひとしおである。これは奔月が戰鬪的雜文であると同時に、彼の心情を吐露した内的告白の書として野草に通じるといふ特質をもつてゐることである。すなわち、奔月は小説、雜文、野草というそれぞれ異つた魯迅文學の構成要素を具有してゐる。こゝには、いろいろな魯迅文學の型態が集中してゐる、思想的にも文學的にも轉換の最尖端にたつていたこの時代（一九二六年）の魯迅の文學形式を集約的に表現してゐるのが奔月である。この間の事情は兩地書をしらべることによつてあきらかになるだろう。たとえば、第二集の六十、七十一、七十三、七十五、七十九、八十三、等である。

鑄劍になると幻想的怪奇である。だが前の二作品よりずつと雜文性が強い。この主題は執念深くしぶとい復讐心であり、奔月とともに當時の魯迅精神の主要特徴である寂寞と戰鬪という二つの面を代表してゐる。これを單に傳奇的な物語としてとることは誤りである、何故なら魯迅の當時における戰鬪任務が何であつたか、また華蓋集や兩地書、野草との關連を考えてみねばならないから。すると、これは三・一八事件直後に書かれた雜文と同じ調子に戰鬪的である。華蓋集續編をみれば、われわれはそこに戰鬪的啓蒙主義者としての魯迅が、いかに暗黒支配勢力の陰險、惡劣、殘忍を暴露し、或いは尖銳に諷刺し或いは直接に攻撃し、完全に被壓迫者の側にたつて彼らの弱點をも批判し、暗黒勢力といかに戰うべきかを教えてゐる幾多の雜文を發見できるはずである。

從一般的人、尤其是久受異族及其奴僕鷹犬的蹂躪的中國人看來、殺人者常是勝利者、被殺者常是劣敗者。而眼前的事實也確是這樣。（華蓋集續編・死地）

人們的苦痛是不容易相通的。因爲不易相通，殺人者便以殺人爲唯一要道，甚至于還當做快樂。（同上）

我已經說過：我向來是不憚以最壞的惡意來推測中國人的。但這回卻很有幾點出于我的意外。一是當局者竟會這樣地凶殘，一是流言家竟至如此之下劣，一是中國的女性臨難竟能如是之從容。（華蓋集續編・記念劉和珍君）

這回死者的遺給後來的功德，是在撕去了許多東西的人相，露出那出于意料之外的陰毒的心，教給繼續戰鬥者以別種方法的戰鬥。（華蓋集續編・空談）

三・一八事件をけい機に鑄劍が書かれたものかどうかは知らない。しかしこの「死地」をみたゞけで、その類似性がわかる。鑄劍における專政者の陰險殘酷に對する憎しみと、徹底した反抗報復の精神、それも血潮には血潮もてという武力復仇心が強く出ている點で全く同一といつてよい。だから鑄劍を雜文の一體と見做すのも一應はもつともであり、こういう説もなりたつ。ではあるが、われわれは魯迅の次のことばを想いおこす。これはどういふことか。

我以爲根本問題是在作者可是一個『革命人』，倘是的，則無論寫的是什麼事件，用的是什麼材料，即都是『革命文學』。從噴泉裏出來的都是水，從血管裏出來的都是血。（全集第三卷五二頁而已集・革命文學）

魯迅の文學は、その思想とともにさらに社会的實踐とともに發展したが、魯迅の創造的文體の一つである雜文も、彼の思想の發展深刻化とともに發展した。雜文の最も特徴的なものは詩と政論が融合し一體となつてゐることであるが、この政論も思想の一部分として彼の頭腦に概念としてひつついてゐるのではない。かえつて、社会的戰鬥の實踐の結果、骨肉化したものとして彼の肉體の一部分なのである。

右の魯迅のことばで、革命者であるならば何を書き何を材料にしても革命文學であるといふことはよく味わねばならない、でないといふと、とんでもなく魯迅を誤解することになる。たとえば、朝華夕拾を例にして考えてみよう、魯迅の自敘傳或いは追憶といわれているこの書物は、恐らく魯迅のものでいちばん政論に乏しいといえる。しかし、それにもかゝらず、戰鬥的な魯迅の雜文性を見出すのに困難でない。「狗、猫、鼠」、「二十四孝圖……」「無常」、「瓊記」などがそうである。これらのなかにある政論、時局批判、反動的人物に對する批判と諷刺について、人はいふかもしれない。これらははじめからそれと意識して書いたものではない、そして追憶の敘述のすゝむにつれておの

ずと滲み出てきたものである。はつきりしていることは、晩年の雜文のように、暗黒勢力に對する意識的計畫的攻撃を目的とした匕首としての雜文とはちがうと。このことから次のようにいえるかもしれない。故事新編前期の作品も同様である、とくに補天についてはそういうえるし、奔月や鑄劍についても全くいえないとはいへきれない。だから故事新編において魯迅が意識的に雜文性をもたせようとしたことは疑問であると。だが、魯迅が力點をおいているのは、文學者が革命者でなければならぬことであつて、何を書き何を材料にしてもよいということではない。概念においてではなく、肉體的に革命者であることだ。そういう革命者は無意識のうちにも何を書き何を材料にすべきかをえらんでいる、そういうものがおのずから滲みでてくるのである。もつとも後期の魯迅は積極的に意識してそう行動したが、前期においてはそのへんがぼんやりしている。だが、右の魯迅のことばをもとにして、故事新編や朝華夕拾における雜文性を消極的に解しその雜文性の積極的意圖を軽くみるのは誤つてゐる。

次に雪葦が典據として引いているものをしらべてみる。

彼は奔月が淮南子、孟子、列子等を綜合したものであるとして、次のような例をあげている。

『堯之時，十日並出，焦禾稼，殺草木，而民無所食。稷、鑿齒、九嬰、大風、封豨、修蛇，皆爲民害。堯乃使羿誅鑿齒於疇華（南方池名）之野，殺九嬰於凶水之上，（北狄有凶水）繳大風於青邱之澤。（東方）上射十日而下殺稷，斷修蛇於洞庭，禽封豨於桑林。（洞庭側）……』（『淮南子』：『本經訓』。又高誘註云：『稷，獸名也，狀若龍首，或曰似狸。善走而食人，在西方也；鑿齒，獸名，齒長三尺，……持戈盾；九嬰，水火之怪，爲人害；大風，風伯也，能壞人屋舍；封豨，大豕，楚人謂豕爲豨也；修蛇，大蛇，吞象三年而出其骨之類。』）

『逢蒙學射於羿，盡羿之道，思天下惟羿爲愈己，於是殺羿。……』（『孟子』：『離婁篇』。）

『甘蠅，古之善射者。……弟子名飛衛，學射於甘蠅，而巧過其師。紀昌者，又學射於飛衛，飛衛曰：爾先學不瞬，而後可言射矣。紀昌歸，偃臥其妻之機下，以目承牽挺。二年之後，雖錐未倒，背而不瞬也。以告飛衛，飛衛曰：未也，必學視而後可。視小如大，視微如著，而後告我。昌以鵝縣蝨於牖南面而望之。旬日之間，浸大也；三年之後，如車輪焉。以覩餘物，皆丘山也。乃以燕角之弧，朔蓬之箛射之，貫蝨之心而懸不絕。以告飛衛。飛衛高蹈拊膺曰：汝得之矣！紀昌既盡衛之術，計天下之敵己者一人而已。乃謀殺飛衛。相遇於野。二人交射，中路矢鋒相觸而墜於地，而塵不揚。飛衛之矢先窮，紀昌遺一矢，既發，飛衛以棘刺之端扞之而無差焉。於是，二子泣而投弓担拜於塗，請爲父子，尅臂以誓，不得告術於人。』（『列子』：『湯問』。）

『羿請不死之藥於西王母，姮娥竊以奔月。』（『淮南子』：『覽冥訓』。高誘注云：『姮娥，羿妻。羿請不死之藥於西王母，未及服之。姮娥盜食之，得仙，奔入月中爲月精。』）

『羿左臂脩而善射。』（『淮南子』：『修務訓』。又：高誘註於同書『俶真訓』云：『堯時羿善射，能一日落九鳥，繳大風，殺契窻，斬九嬰，射河伯……。非有窮后羿也。』）

『豐狐文豹棲於山林，……』（『莊子』：『山木篇』。）

なお、鑄劍については、淫樂残忍な王はあきらかに吳越春秋の楚の莊王、平王、吳王夫差および越王勾踐など

の荒淫残忍の記録にもとづいたものとしている。

奔月の典據として雪葦は多くを引いているが、これは大した重要性をもたない、兩地書第二集の一一二と李露野宛の書簡だけで、これが歴史を描こうとしたものではなく、單にそれをかりて高长虹を諷していることは疑いない。まして魯迅の歴史觀からみて右にあがつているような古籍にもとづいた歴史小説を書くということは格別意味をもたない。

鑄劍となると、なおさら楚や吳の王様がどうのというよりは、むしろ幻奇的な物語につままれた復讐心の方が重大なのであつて、古籍はほんの借物といつた感じである。總じて雪葦の故事新編論は古籍にひきずりまわされてしまつたといつてもいゝ過ぎではなさそうである。

以上によつて、私は故事新編前期の三篇をつらぬく主流となつてゐるものが、雜文性にあることをみた。しかしこのことは伊凡のいうように、歴史的物語の形式をかりた雜文の一體と見做すことではない。後でふれるが、伊凡の見解は後期の故事新編については妥當するかもしれない。伊凡は主として後期のものについて論じているので、前期の三篇についてはそれほど力を入れていない。前期の三篇は形式的、孤立的にみれば、雜文的ではないが、これを内容の思想性および魯迅の社会實踐、他の著作との関連においてみるときその本質が雜文性にあることは認められねばならない。だが、これにはひじょうにいろいろな要素がこみいつている。呐喊や彷徨のように典型の創造をこゝろみてもいるし、兩地書や野草のように心の奥底をのぞかせているところもある。こうみてくると、故事新編は呐喊や彷徨の部類と雜文の部類のいずれの範疇にも入るように入らない。ということとは、兩者の中間に位するということではないだろうか。だが、それをいまこゝで斷言するのはまだ早い、さらに残る五篇を検討してみねばならないだろう。

(未完) 五四年・十一月・二十九日